

発行: 日大土木会広報部

〒101 8308
東京都千代田区神田駿河台1 8
日本大学理工学部土木工学科内
TEL: 03 3259 0662
FAX: 03 3293 3319
http://www.nu-dobokukai.com

日大土木会会報

特別講演や異業種交流

各部署が本格的に始動

異業種交流パネル討論

業務部会

業務部会では、異業種交流委員会を設置し、異業種との交流を通して、会員各位に貢献できるビジネス啓発情報交換、その他を目的とした企画と運営を執行している。異業種とは、様々な産業があり、多岐にわたるものである。将来的には、幅広い異業種との交流が望ましいところではあるが、活動が結ばれたばかりなので、当面は建設産業内での活動を展開する。

そのはじめとして、「建設産業の現状と将来」という演題のもと、次の方々をパネラーに迎え討論会を開催した。

研究部会

二つの研究部会が開催された。

二つの研究部会

去る3月に第1回研究部会、また9月に第2回研究部会が開催された。

先端技術研究会、地球環境技術研究会の両委員会においてそれぞれ3テーマの発表があり100余名の参加者のもと盛況に終わった。現在および今後の土木業界が抱えるであろう問題



企画部会

企画部会は、産官学の方々の処々のご要望を取り込み具体的で実のある活動ができればと考え、会員の皆様のご意見をできるだけ取り込んで、多くを求めず課題を絞って着実に事業を行

国際化と技術革新対応

企画部会の各委員会活動として、以下のものがあるが、そのはじめとして企画委員会による特別講演会を開催した。



特別講演会 山崎裕司先生

各委員会活動

企画委員会 見学会、講演会、事業化の研究、他の委員会に属さない事項の企画と運営
渉外委員会 日本大学、その他の関連との交流と情報交換
国際委員会 世界の建設業界の動向に関する情報交換
特別講演会:

平成13年6月20日、通常総会に先立ち、特別講演会を開催した。講演は、講師にシステマズの山崎裕司先生を迎え、「動乱!二十一世紀の建設経営を考える」と題して行われた。公共事業費の大幅な削減は避けられず、住宅環境の整備への取り組みが打開策の一つであるとの内容を中心におよそ90分に渡り熱心な講演が行われた。

第一回研究部会

去る3月に第1回研究部会、また9月に第2回研究部会が開催された。



第2回研究部会



日大土木会と学生との懇談会

通常総会

平成13年度通常総会並びに懇親会が平成13年6月20日(水)午後6時より、ホテルグランドパレスにて行われた。

総会に先立ち、企画部会(副会長兼企画部長 森元肇夫氏)主催の特別講演が多くの参加者のもと行われた。引き続き、総会に入り山田清臣会長からは、本年度からいよいよ本格的に日大

事業計画などを了承

13年度通常総会を開催

土木会の活動を行う旨、力強い挨拶があった。議長に、副会長兼業務部長の松田慎一郎氏が選出。支決算並びに事業報告が承認された。以下議案は総務部長の村田恒雄氏

総務部会

総会で承認された13年度事業計画の通り、各部署、全国会員との連携を図るため、次のような活動を展開している。

三学部の学生と各界先輩との意見交換会

交流の活性化をめざす

総務部会

各ブロック担当者の決定と総務部会との意見交換会。各部署との意思疎通を図るため、各部署から総務部に委員を選出。会員の拡大。なお、理工学部、生産工学部、工学部への活動支援策として各20万円寄贈した。

学生との懇談会開催

日大土木会と学生との懇談会を2つの会場(理工学部、工学部)において開催した。講師に各方面からOBを迎え(詳細は5面内ニュース)、これからのコンサルタント、建設業、官庁土木行政について講演を行った。学生との質疑応答も活発に取り交わされ、今後も継続して開催することを望む声が多く聞かれた。

木田哲量・日本大学生産工学部土木工学科教授
松田慎一郎・都市みらい整備センター特別顧問
清野茂次・オリエンタルコンサルタンツ会長
吉田 弘・佐藤工業 社長

テーマ:「情報通信技術(ICT)とこれからの土木」
日時:平成13年3月22日(木)
開催場所:日本大学理工学部駿河台校舎731講堂
受賞記念講演:米国土木学会カール・エミール・ヒル

先端技術研究会
司会:秋山 尚夫(先端技術研究会委員長、警視庁交通部理事官、S41理工学専任講師、H7理工学専任講師)

和彦(S50理工学専任) 福祉のまちづくり推進計画と道路
東京都第三建設事務所補修課課長補佐 柳川 宣彦(S46理工学専任)
土木分野への地理情報システム(GIS)の活用
国際航業株式会社東日本事業本部空間情報事業部営業部 青木 純一(S53生産土木)

地球温暖化をめぐる諸問題
日本大学生産工学部土木工学科教授 和田 明(S38阪大博)

展望
アセットマネジメント、ライフサイクルコストの視点から
首都高速道路技術センター 常務理事 和田 克哉(S41生産土木)

司会:遠藤 茂勝(地球環境技術研究会委員長、日本大学生産工学部土木工学科教授、S43理工学専任講師)
東京都における下水汚泥リサイクルの経緯と現状
日本下水道事業団理事 横山 博一(S39理工学専任)

地球環境技術研究会
司会:遠藤 茂勝(地球環境技術研究会委員長、生産工学部土木工学科教授、S43理工学専任)
地球温暖化対策と生ゴミバイオガス化発電システム
鹿島建設 環境本部有機性廃棄物資源化グループ長 雨森 司瑞利(S52理工学専任)

先端技術研究会
テーマ:「インフラのニューリアルとメンテナンス」
司会:秋山 尚夫(先端技術研究会委員長、警視庁交通部理事官、S41理工学専任)

地球環境技術研究会
テーマ:「環境ウォッチング」
海外の動向、ブリッジマネジメントの視点から
日本鋼管 総合エンジニアリング事業部鋼構造本部 主席 五十畑 弘(S46生産土木)

大林組環境エンジニアリング本部環境エンジニアリング部副部長 峠 和男(S41理工学専任)
発電所の環境アセスメントと生態系
東京電力 環境部環境調査グループマネージャ 副部長 北原 宏一(S52理工学専任)

特集1 これからの土木技 術者に求めるもの

若い土木技術者たちへ

レールウェイエンジニア
アリンク社長

横山 章



この8月で75年間、4分の3世紀を生きて来ました。土木技術者を目指して大学の土木工学科へ入ってからでも55年が過ぎました。「今のうちに何か後輩たちに役立つ言葉を残しておけ」ということで、私にこのお話が来たのでしよう。

1、「これだけは誰にも負けない」という専門技術を持つことが大切です。

先輩から言われてきた多くのアドバイスの中で、この言葉だけが未だに心に残っています。「芸に秀でる者は万芸に通じる」という言葉がありますが、一つ自信のある技術を持っていると、専門でない領域においても、これがキーポイントだということが自然にわかってくる。専門バカという言葉もありますが、それより反対に広く大事なことが見えてくるものです。

2、土木の仕事は大部分が公共工事です。国民からの

税金で、多くの人々が長く使う公共の施設を造るので、高い品質の物を安く造らねばなりません。公共建造物はその時代の文明の象徴でもあります。それだけに「これは俺が造ったのだ」という誇りを持つべきです。

3、土木建造物も美しく造らねばなりません。私は若い頃から合理的な設計が最も高く、無骨な高架橋やトンネルの坑門などを造ってきたことを反省しています。

今土木建造物もかなり美的センスを持って設計されるようになりましたが、まだ建築などに比べるとその配慮が少なく思えます。

4、これからは長い人生の間には、苦しいこと、困難なことにはぶちあたることが多いと思います。そんな時に「なぜ自分だけがこんな辛い目に逢うのだろう」と嘆かずに、むしろ「天が与えてくれた良いチャンス」と喜んで下さい。その困難を乗り越えた時、きっと貴方は自分が一週りも二週りも大きく成長しているのに気づくでしょう。

私は41歳で青函トンネル竜飛方の初代所長をしていた時、調査坑の掘削工事で大出水事故を起こしました。坑道は水没し、工事が存続できるか否かの危機で

した。しかし皆で力を合わせてその出水を止め、危機を乗り越えた時、「こうすれば大きな出水でも止められる、青函トンネルは掘ることが出来る」と大きな自信となって、本トンネル着工のきっかけとなりました。本州の北端、竜飛での4年間は悪戦苦闘の連続でしたが、後で振り返る度に、今日の自分があるのはあの苦しかった時代のお陰であると感謝しています。

5、「なぜこうなのか？」と多くのことに疑問を持ちましょう。疑問を持つたならば、即座にそれを説明するために行動を起こすことが大切。本で調べるのもよし、先輩に聞くのもよいでしょう。それによって貴方は他の人より一歩も二歩も先を歩むことになるでしょう。

6、将来貴方が右に行くか左に行くか悩んだ時には、苦しい方の道を選んでください。物事を自分の損得で判断せずに、どちらが他人のためになるかで決めてください。そうすれば悔いのない人生を送れるでしょう。

横山 章氏

一九五〇年(昭和25年) 日本大学工学部土木工学科卒業
一九六二年 日本国有鉄道岐阜工務局線増設課長
一九七九年 日本鉄道建設公団東京支社長
一九八二年 日本鉄道建設公団理事
一九九三年 フジタ副社長
二〇〇〇年 レールウェイエンジニアリング社長
現在に至る
一九九四年 紫綬褒章受章
工学博士

日本海・佐渡の海から

新潟県農林水産部参事 港課長

市橋 拓三



お茶の水の校舎で学んでからもうすぐ35年が過ぎようとしています。もっとも、工科空手道部の稽古が主で、勉学の方は本会の木田理事らに随分お世話を受けた事を思い出します。本寄稿は、全国漁協協会の坂井淳会長から、日頃漁港漁村の振興についてご指導をいただいているご縁で機会を得ました。

新潟県庁9階の窓から日本海が、そして故郷の佐渡が見えます。この海を舞台とする本県の水産業も外国漁船の乱獲、漁獲量や担い手の減少、高齢化の進展等大きな曲がり角にありま

す。水産物の安定供給、漁村の総合振興を柱に漁港行政の展開を目指しています。従来型の社会資本整備は、投資効果の点からも困難であります。しかし、国土保全、国防、地域社会の成り立ちや、安全な食料供給を考えると、水産業や漁村の活力低下、過疎化をこのまま放置出来ません。投資効率だけでなく、新潟沿岸や佐渡の漁村が如何に生きるか、その為の個々の漁港や漁村はどうあるべきか。地域の課題や地域経営にとって、どのような社会

資本整備が必要か、各々の漁港背後集落別に漁村ビジョンや佐渡マリノレジャー構想を作成し、次期長期計画に活かそうと考えています。

私の前任地、与板土木事務所は、越後平野を洪水の惨禍から救った、大津津分水が日本海に注ぐ地点であり、良寛が生まれ遷化した、良寛ゆかりの地であります。管内の、和島村と与板町を結ぶ県道に、良寛の歌碑が建てられています。

「塩の入りの坂は名のみになりけり ゆく人唄へ 萬代までに 峠道の改良に感謝する、約200年前の良寛の歌が公共社会資本整備の真を現しています。

平成7年以来、村上・与板両土木で管内の将来プラン「岩船村上21計画」良寛の里づくり」を作成しました。地域の将来像を基に、揺り籠から墓場まで、地元で生まれ育ち、子育てをし、他の地域を養わず、一生を暮らす為の公共社会資本整備全体計画は如何に。全てを満足するには、現在の投資規模を進めて、50年以上の年月と膨大な事業費が必要で、限られた投資規模の中で、今生きている人が利用出来る施設規模を整備順位を考慮してみま

た。

今、本場に必要なのは、何か、専門化が進む中、我々土木技術者は、部分にとられることなく、地球規模の資源や環境などに思いが至る総合力が必要ではないでしょうか。

大津津分水在堰補修工事竣工記念碑に、青山士

は、「万象に天意を覚る者は幸なり」
土木学会の規約調査委員 長として、「土木技術者の信条」をまとめた青山は、そして、人類の為に、国の為めと続けています。この清廉で最善を尽くす生き様を忘れていないでしょうか。

諸葛孔明は、「夫れ志は

当に高遠を存し」と最後は気と情であると教えています。

大きな時代潮流にも、この気と情を基に視野を広く持つ総合力、企画力を磨けば、土木技術者の未来には大きな夢と希望が待っていることを確信しております。

平成13年9月4日
(昭和42年理工・土木)

最前線

社会交通工学科とは

日本大学理工学部 社会交通工学科 教主任

巻内 勝彦



現下のわが国の理工系各大学は、18歳人口減少、理工系離れ、基礎学力低下、志願者全入時代、等々の受験生の数と質の変化の激しい波をかぶりながら様々な変革と対応を迫られています。多くの理工系学科の入学試験受験者数は20年前の全盛時代に比して半減しているのが実状です。しかし波はこれだけではありませぬ。公共事業および道路特定財源の見直しなど、卒業先の建設界をめぐる動きは

かつてないほどの荒波にもまれています。こうした時代の大きな変容の中で、いずれの土木系学科もそれぞれの特徴が求められ、また教育と研究の質が問われています。現在は、従前の大学内部の自己点検評価システムから、日本技術者教育認定制度(JABEE)、民間調査による国内研究機関ランキングの公表、土木学会認定技術者資格制度、などの教育機関や卒業生の外部評価の形態に移行されつつあり本格化しています。

今後は、将来を見据えた新しい専門教育と技術者育成へのさらなる改良を模索する必要があります。こうした状況への対応は、実に厳しいものがあり現状は四苦八苦の苦難の道にありま

りますが、本学科では真の意味での教育・研究への改革が達成される方向にあるものと厳粛に受けとめ、か

つ歓迎し、前向きな改善を進めていますので、ここにその一端を紹介させていただきます。

本学科の歴史を顧みますと、学科創立は日本の経済・産業が急速な発展の兆しを見せつづつあった1961(昭和36)年でありました。この時代はモータリゼーションの幕開けでもありましたが、時代の要請を先取りして、社会基盤である交通施設の建設から運用にかかわる総合技術を教育・研究する、わが国で唯一のユニークな学科「交通工学科」として設置されたわけ

です。のちに「交通土木工学科」と名称を変更しましたが、交通技術分野のバイオニアとして、常に先進的な教育・研究を続け、将来の交通・都市・環境および社会のあるべき姿を考え、高度な専門技術と広い知見を身につけた交通技術者の育成を目指し、社会に貢献してきました。

21世紀を迎えた今、「交通」は新たな視点を加えた学際的立場で見直す機運が高まっています。社会システムとそれを構成する人間への注目、高度情報システムとの交通への応用などでありま

す。2000年11月には交通バリアフリー法が施行され、福祉社会の交通施設づくりが重要課題として位置づけられました。また、情報化社会に向けたITS(高度道路交通システム)など、新しい交通システムも稼働し始めていま

す。

こうした社会の変化とニーズに対応し、本学科は2001年4月に、交通土木工学科から社会交通工学科に学科名を変更しました。英

語名は Department of Transportation Engineering and Sofo Technology) ことに伴い、これまでの学科の伝統を継承するとともに、学問領域を広げて世界に貢献し将来を担う技術者を養成するための新たなカリキュラム編成の検討を開始しています。検討方針の骨子は以下に示すとおりであります(なお、日本大学理工学部全体でもカリキュラム改定の検討を進めているところであり、学部の共通方針およびJABEEの教育方針を踏まえています)。

・緩やかなコース制の導入
・基礎的かつ系統的な科目群の履修
・設置科目の縮減と学際的科目の弾力的運用
・基礎学力向上と専門への導入教育の充実
・自己啓発能力、技術者倫理、考える能力の育成
・国際性(コミュニケーション力、国際共通語の習得)

・実務技術者教育と大学院を含めたリーダー教育の有機結合
・「交通」というキーワードに環境・福祉・都市・公共・情報化・国際性を付加
・日大土木系の伝統と実績の継承の上に学科創設に由来する特化した専門学科のユニークさを活用

学生の履修科目は、一般教養科目、基礎教育科目、基礎的必修専門科目の修得の後、下記の3つ系群に配置した各コースにおいて専門性を高めることができるとに配慮しています。

・緩やかなコース制という意味は、各学生の希望する専門科目の履修に際して、当学科の特色であるA

またはBの科目群の選択が可能にしたい上で、土木技術者資格や公務員試験などに対応できるようにCの幅広い土木系科目を習得するように構成している点にあります(ここで科目名は割愛)。

A・トランスポートেশヨ
ン・コース(交通計画・工学系群)
B・ソシオテクノロジ
ー・コース(社会・環境系群)
C・インフラストラクチャー・コース(社会基盤系群)

社会交通工学科となつて、これまでの分野に加え、学科が取り組むべき新たな領域分野としては、以下の例を挙げることが出来ます。

・人にやさしい交通 … 高齢者や障害者が、健常者と一緒に暮らせるユニバーサルデザインを基調としたリアフリーの社会造りを目指し、だれでも安心して移動できる交通空間を創造する。

・暮らしと環境を守る交通 … 環境負荷が小さく、エネルギーを大切に交通のあり方を提案する。

・安全で快適な交通 … 情報・通信などの新しいテクノロジーを駆使し、安全で快適な交通体系を構築する。

以上、当学科が改名するに至った状況と経緯および新しく検討中のカリキュラム構成の考え方について概略ながら述べさせていただきました。最後に、今後とも日大土木系の先達各位のご支援とご指導を賜りますよう切にお願い申し上げます。(昭和42年理工・交通)

特集2 土木学会技術者資格制度の紹介

グローバル化へも対応

理工学部社会交通工学科 教授

高田 邦道



1、はじめに

2001年5月19日土木学会の理事会で「土木学会技術者資格」制度が承認され、後述する「特別上級技術者」は本年度からスタートすることになった。著者はこの制度の創設委員会の第4部の代表幹事として参画していたので、資格制度の紹介と若干の経緯を報告する。なお、用語・語句の手直しは頻りに行なわれているので、8月20日時点のものを用いていることをお断りしておく。

2、資格制度導入の背景

学会としての考え方は、理事でもあり、この創設委員会の委員長および幹事長がまとめた文献1)および2)を参照して戴きたい。ここでは、著者の受け止め方を述べていく。

わが国では、土木系の卒業生が約8000人、関連業種への就職が約5000人である。先進国の人口比率で見ると、2000年3000人が適正といわれている。土木学会では、5000人に削減することを提案しているが、この大学を減らすのか、各大学とも1/3の削減をするか、決められることはない。

一方、土木工学の学問を修得し、あらゆる分野に進出すればよいという考え方もある。その一方で、土木技術のレベルも問われている。さらに、土木分野の拡大は、その専門が細分化、深化したことで、土木の技術コアの修得が十分でないケースが生じている。いわゆる土木工学という専門分野の空洞化である。その時、専門外の人は、卒業学科で判断するので、土木技術の本質が疑われることになる。このような土木工学の分化と土木系学科の乱立の背景を学会が自主規制、自主管理を目指した試みといえる。

第2は、国際化が進み、業務上あるいはそれぞれ国の勢力拡大に国際基準なるものを持ち出し、そのひとつが技術者資格である。この流れに対抗し、世界のトップレベルにあるわが国の土木の養成プロセスを堅持することも重要である。そのためにも、土木技術の学会である土木学会が養成機関である大学・高専・工業高校・専門学校などの専門教育機関と呼びかけていかなければならない。そのメッセージとして位置づけられると同時に、他の資格制度と相互認定するなどの相乗りが可能となる。

第3は、わが国が独立歩で、業界が一丸となって世界の経済と闘い、一定の経済的勝利を収めてきた。これからは、これを維持するために、従来の護送船団方式から競争市場方式に方向転換せざるを得なくなってきた。すなわち、組織基盤社会から個人基盤社会への変換である。そのうえ、学問が高度化して前述した空洞化に対応するため、出発点は原籍(土木)の明確化が必要となり、卒業後時間の経緯とともに多様化・総合化した分野の認定が必要となってくる。

紙数の関係で主たる点のみ述べたが、このような背景から資格制度は誕生し、規制緩和が進み、分野の高度化・多様化が進むほど専門性が必要なることを認識して戴きたい。

紙数の関係で主たる点のみ述べたが、このような背景から資格制度は誕生し、規制緩和が進み、分野の高度化・多様化が進むほど専門性が必要なることを認識して戴きたい。

紙数の関係で主たる点のみ述べたが、このような背景から資格制度は誕生し、規制緩和が進み、分野の高度化・多様化が進むほど専門性が必要なることを認識して戴きたい。

紙数の関係で主たる点のみ述べたが、このような背景から資格制度は誕生し、規制緩和が進み、分野の高度化・多様化が進むほど専門性が必要なることを認識して戴きたい。

紙数の関係で主たる点のみ述べたが、このような背景から資格制度は誕生し、規制緩和が進み、分野の高度化・多様化が進むほど専門性が必要なることを認識して戴きたい。

土木学会の理事で、土木学会技術者資格制度が承認され、後述する「特別上級技術者」は本年度からスタートすることになった。著者はこの制度の創設委員会の第4部の代表幹事として参画していたので、資格制度の紹介と若干の経緯を報告する。なお、用語・語句の手直しは頻りに行なわれているので、8月20日時点のものを用いていることをお断りしておく。

紙数の関係で主たる点のみ述べたが、このような背景から資格制度は誕生し、規制緩和が進み、分野の高度化・多様化が進むほど専門性が必要なることを認識して戴きたい。

紙数の関係で主たる点のみ述べたが、このような背景から資格制度は誕生し、規制緩和が進み、分野の高度化・多様化が進むほど専門性が必要なることを認識して戴きたい。

紙数の関係で主たる点のみ述べたが、このような背景から資格制度は誕生し、規制緩和が進み、分野の高度化・多様化が進むほど専門性が必要なることを認識して戴きたい。

紙数の関係で主たる点のみ述べたが、このような背景から資格制度は誕生し、規制緩和が進み、分野の高度化・多様化が進むほど専門性が必要なることを認識して戴きたい。

紙数の関係で主たる点のみ述べたが、このような背景から資格制度は誕生し、規制緩和が進み、分野の高度化・多様化が進むほど専門性が必要なることを認識して戴きたい。

紙数の関係で主たる点のみ述べたが、このような背景から資格制度は誕生し、規制緩和が進み、分野の高度化・多様化が進むほど専門性が必要なることを認識して戴きたい。

紙数の関係で主たる点のみ述べたが、このような背景から資格制度は誕生し、規制緩和が進み、分野の高度化・多様化が進むほど専門性が必要なることを認識して戴きたい。

紙数の関係で主たる点のみ述べたが、このような背景から資格制度は誕生し、規制緩和が進み、分野の高度化・多様化が進むほど専門性が必要なることを認識して戴きたい。

土木学会の理事で、土木学会技術者資格制度が承認され、後述する「特別上級技術者」は本年度からスタートすることになった。著者はこの制度の創設委員会の第4部の代表幹事として参画していたので、資格制度の紹介と若干の経緯を報告する。なお、用語・語句の手直しは頻りに行なわれているので、8月20日時点のものを用いていることをお断りしておく。

紙数の関係で主たる点のみ述べたが、このような背景から資格制度は誕生し、規制緩和が進み、分野の高度化・多様化が進むほど専門性が必要なることを認識して戴きたい。

紙数の関係で主たる点のみ述べたが、このような背景から資格制度は誕生し、規制緩和が進み、分野の高度化・多様化が進むほど専門性が必要なることを認識して戴きたい。

紙数の関係で主たる点のみ述べたが、このような背景から資格制度は誕生し、規制緩和が進み、分野の高度化・多様化が進むほど専門性が必要なることを認識して戴きたい。

紙数の関係で主たる点のみ述べたが、このような背景から資格制度は誕生し、規制緩和が進み、分野の高度化・多様化が進むほど専門性が必要なることを認識して戴きたい。

紙数の関係で主たる点のみ述べたが、このような背景から資格制度は誕生し、規制緩和が進み、分野の高度化・多様化が進むほど専門性が必要なることを認識して戴きたい。

紙数の関係で主たる点のみ述べたが、このような背景から資格制度は誕生し、規制緩和が進み、分野の高度化・多様化が進むほど専門性が必要なることを認識して戴きたい。

紙数の関係で主たる点のみ述べたが、このような背景から資格制度は誕生し、規制緩和が進み、分野の高度化・多様化が進むほど専門性が必要なることを認識して戴きたい。

紙数の関係で主たる点のみ述べたが、このような背景から資格制度は誕生し、規制緩和が進み、分野の高度化・多様化が進むほど専門性が必要なることを認識して戴きたい。

土木学会) Executive Professor (SCE) 土木技術に関する広範な総合的知見を有するが、極めて高度な専門知識と経験を有し、課題に対して自己の責任で適切な指導・助言できる能力を有する。

(4) 審査方法

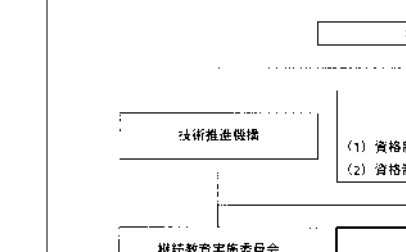
資格	書類審査	選択問題	記述式問題	面接試験
特別上級技術者	○	×	×	○
上級技術者	○	×	○	○
1級技術者	○	○	○	×
2級技術者	○	○	×	×

表-1 資格分野の内容(資格要件及び技術分野)

資格要件	技術分野
【資格要件】社会基盤施設の整備や事業の運営を責任を持って実施したり、判断することのできる総合的な能力を有していること。	【技術分野】構造学、各種社会基盤施設(河川・流域・都市、交通、地盤防災等)、プロジェクトマネジメント、環境等の全分野
【資格要件】コンクリート、鋼等の構造材料のうち、いずれか一つを主分野として、その材料特性及び設計・製作・施工・維持管理に関する総合的な知識と経験を有していることと、主分野以外の分野に関する専門的な知識を有していること。	【技術分野】コンクリート構造、鋼構造、合成構造、複合構造、木構造、複合材料など
【資格要件】地盤調査、土質試験、基礎構造、地下構造物、地盤改良等の計画、設計、施工に関する知識と経験を有していることと、計画やその結果の評価、地盤・岩盤・基礎に係わる構造物の維持管理等を行う能力を有していること。	【技術分野】地盤調査、土質試験、土構造物、基礎構造、地下構造物、地盤改良、地下水、地盤防災、地盤環境など
【資格要件】流域・都市を連携して捉え、これらに関連する社会基盤施設の計画、整備、維持管理などを取り扱うことのできる能力を有していることと、都市・流域の開発や環境整備、ライフライン・エネルギー施設などの都市基盤施設の整備・維持管理、水環境の保全・整備、災害を含む流域・都市管理、河川・海岸整備事業等の知識を有していること。	【技術分野】河川計画・流域計画、都市計画、ライフライン・エネルギー施設、河川、海岸、海洋、環境保全、環境管理、防災など
【資格要件】交通・運輸に係わる道路、鉄道、港湾、空港及び駐車場・ターミナル等の施設を連携して捉え、ロジスティクスや情報通信システムなどの広汎な基礎知識を備えて、計画、整備、維持管理等を行うことのできる能力を有していること。	【技術分野】交通・運輸計画、ロジスティクス、情報通信システム、道路交通システム、道路、鉄道、港湾、空港など
【資格要件】土木事業を推進するに当たっての計画の立て方、その手法、その支えとなる調査・探査及び計画、あるいは住民参加・情報公開などの計画技術を有していることと、社会経済分析評価、需要予測、景観計画、土木遺産調査、リモートセンシング、GIS等に関する知識を有していること。	【技術分野】計画、調査、評価、景観、土木史、土木遺産調査など
【資格要件】鋼構造、複合構造、コンクリート構造の設計・耐震設計ならびにCAD等の設計支援技術に関する知識と経験を有していることと、構造デザイン、荷重入力、地盤基礎、解析・シミュレーション技術等に関する知識を有していること。	【技術分野】設計基準(規準)、設計法、設計論、荷重・外力、解析法、シミュレーション技術、設計支援技術など
【資格要件】建設現場における施工に関する技術的判断や建設事業の運営に関する技術的判断を行うことのできる能力を有していることと、工事計画、施工管理(品質管理、コスト管理、工程管理、安全管理、環境管理)、リスクマネジメント、積算、入札・契約、CAI S等に関する知識を有していること。	【技術分野】建設機械、工事管理、積算、入札・契約管理、技術評価、法令・基準など
【資格要件】トンネル、ダム、橋梁等の土木構造物のメンテナンスならびにそれらの支援技術に関する知識と経験を有していることと、非破壊検査、モニタリング、健全度評価手法、補修技術、ライフサイクルコスト評価等に関する知識を有していること。	【技術分野】維持管理手法、補修・補強技術、検査手法、劣化度予測・評価技術など
【資格要件】都市域などの人工空間、社会基盤施設ならびに自然空間などの自然空間の安全性向上と防災・保全、ならびにそれらへの支援技術に関する知識、経験を有していることと、耐震・耐風・治水・治山技術、地盤・火災防災、土砂防災、健全度評価、余寿命予測、補修・補強技術、更新計画、ライフサイクルマネジメント、災害・事故リスクの評価等の知識を有していること。	【技術分野】耐震・耐風・治水・治山技術、健全度評価、維持・補修・補強技術、災害・事故リスクの評価など
【資格要件】土木遺産施設やシステムの設計と管理、廃棄物の管理と処理・処分システム、生態系の保全、水環境の保全、大気環境の保全、土壌環境の保全、騒音と振動の防止、環境影響評価、ライフサイクルアセスメント等の知識と経験を有していること。	【技術分野】環境保全、環境管理、環境システム、上水道、排水システム、廃棄物など

ており、かつ、将来的に発展していきける(または発展させていくべき)分野であることが明確に説明できるものをひとつの分野として設定する。自己の業務を遂行するために必要な周辺知識を含む範囲の基礎・応用知識を有していることと、経験を確保する。

2) 池田駿介「土木学会技術者資格の創設と継続教育(C&D)の必要性を訴える」土木学会 Vol.85 No.8 pp.78-80,2000



示すような組織が、遅くとも10月までに設置される予定である。手探りの面もあり、実施しながら修正が加えられるので、会員の皆様にはその動向に十分注意して対応して戴きたい。

参考文献 1) 岡村 甫「土木技術者資格の認定を土木学会で」土木学会誌 Vol.85 No.1,p.3,2000

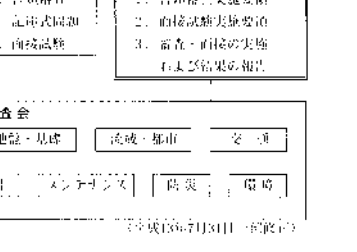
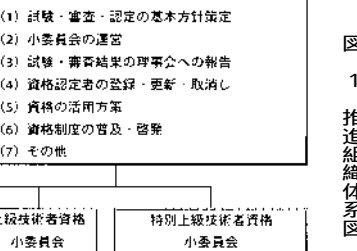
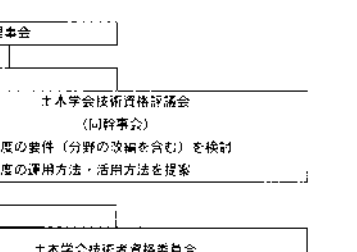


図 1 推進組織体系図

PF1の現状と展望

特別寄稿 前田建設工業 代表取締役専務

川嶋 信義



たこともあり、PF1を導入すればどのような事業であつても民間が全て資金を出し、公共は何の負担もせず社会資本整備ができる。打ち出の小槌のように考えていた自治体も多かったのは事実である。

この他、公募前の実施方針の策定やさらにその前段階

にあたるPF1の実現可能性調査を行っている自治体は枚挙にいとまがない。PF1が確実に拡がりつつある証左である。

一方、民間企業側を見れば先の26事業に対して単独あるいはグループで応募を行った企業数は、企業名が公表されているものだけをカウントしても約280社に及ぶ。業種は建設会社、商社をはじめとして、リース会社、設計事務所、メーカーからスポーツ関連会社など、対象となる事業の内容に応じた実に様々である。そして、

多くの場合、建設会社が代表企業として各種企業をとりまわって参画を図っている。建設市場の縮小が続くが、施工高の確保といった直近の目標があるのは確かであるが、今後、設計、施工だけでなく顧客に対してファイナンスや運営などといったトータルなソリューションを提示していくことが求められている建設会社にとっては、PF1は総合的な企業の能力を示す試金石と考えられる。そういった新たな可能性を發揮するフィールドとしてこの26事業が建設

業界にとつて数以上の大きなインパクトを与えた意味がある。このように第一歩を踏み出したPF1であるが、個々の事業内容を精査すれば様々な課題があることも一方では間違いない事実である。それらを解決するには唯一の答えは無く、より多くの事業で試行錯誤を重ねつつ改善していくしかない。ただ主な課題として、ここでは敢えて2点提起しておきたい。

ひとつは事業者選定に係る一般競争入札の問題である。国のガイドラインでは民間事業者の創意工夫を評価する場合に価格以外の条件を含めて選定する総合評価を一般競争入札の適用を可能としている。しかし、一般競争である以上入札時の契約内容で契約を結ぶことが原則であるが、数年にわたる運営、維持管理などを含む広範かつ詳細な契約を結ぶには、事業者と発注者が綿密に交渉を行い、万が一、優先交渉権者(落札者)との交渉が不調に終わった場合は次点者との交渉も可能となるように、PF1に対応した入札契約制度を確立する必要がある。

もう一点は、税制の問題である。例えば、通常PF1事業において民間事業者は、公共側から受け取る費用の中から建物の長期修繕費の積み立てを行うが、公共が同じようにこれを行っても税金がかからないのに対し、建物の使用がほとんど公共に限定され、最終的には公共側に移管されるにも関わらず、民間事業者の場合は利益とみなされて税金がかかる。このため民間事業者が一定の採算性を確保しようとする場合、公共が従来型で整備するよりも財政支出が多くなり、VFMの実現が困難になる。よって、運営等において民間のノウハウが活かされる可能性があつてもPF1が選択されないかたえPF1で行つたとしても民間事業者の事業性を必要以上に損なうことになる。こういった所でもPF1を一般の事業とは異なるものとして捉えた特別な税制措置が望まれるところである。

限移譲を危惧するものの消極的な態度により、スタートは必ずしも順調ではなかったといふ。

最近思うこと

建設会社に入社して、はや9年がたつた。私は、バブルの崩壊後であり建設業界の景気はあまり良くはなかつたが、最近是一段とひどくない。年々収収が減ってきている。妻を抱え、将来のことを考えると不安ばかりが募り、毎日ストレスが溜まっていくなりがちである。国や地方の財政悪化の中で、構造改革で、毎日、新聞を賑わせているのは建設業界ばかりである。今後どうなっていくのだろうか？ 早く景気が良くなることを祈るだけである。

現在、経済財政の厳しい情勢の中で、環境・エネルギー問題、社会資本ストックの維持管理、構造物の耐久性、コスト削減等、将来に向けて解決されるべき課題がある。それらの課題に対して対処するため、技術開発や体制・システムを整備されると思う。しかし、私の業務範囲である施工側では、その技術革新

のスピードを懸命に追いかけている状況であると感じている。さらに、ISO規格、建設CALS/EC、公共工事の入札・契約の適正化、工事成績評価、経営環境からの配置職員不足、若手技術者の教育、現場での不具合対応、企業としての利益確保等、多様なキーワードが考えられる。

ま、一人では何も出来ない。仲間(組織)と共に地道に明るく業務に精を出していこうと思ふ。

大手ゼネコンに勤務している。工事案件が減少し、工事規模が小さくなる中で、会社経営者は社員を減らし、人事評価がますます厳しくなっている。そんな中で、会社の向上を考えず、自分の出世を第一に考える人間が目立つ。自分の知識・経験を自分の評価する人間にだけ展開し、社内の他の人間には教えない、卑劣者である。

そんな中で、KMなる企画が打ち出された。Knowledge Managementと呼ばれるこの企画

は、イントラネットを通じて個人の知識を社内不特定多数に展開し、会社全体の知識にしようとするものである。KMをイントラネットに登録した社員は、1ナレッジという単位で評価され、これも人事評価の一環になる。KMに登録する知識はどんな事でも良い。建設技術に関する事を始め、株に関する事、日常生活に役立つインターネットアドレスや、美味しいラーメン屋の紹介までなんでもよいのだ。何が会社の利益になるか分らないからである。建設会社の社員みんなが美味いラーメン屋を知っているなんて、興味深いではないか。

最近では、国による道路特定財源の見直し、長野県では脱ダム宣言と、土木業界には逆風が吹いているように思われます。確かに、今までと同じことをしてはダメだ。この大変革の時代に取り残されてしまふことと思ひます。しかしながら、これらの逆風をプラス思考で考えれば、今ま

拡声器

大抵、人手が必要なのは、個人か個人的には思っていないか、と個人的には思っています。私も企業で働く一人です。その瞬間瞬間を大切に、日々頑張ってきたと思つていきます。

最近では、国による道路特定財源の見直し、長野県では脱ダム宣言と、土木業界には逆風が吹いているように思われます。確かに、今までと同じことをしてはダメだ。この大変革の時代に取り残されてしまふことと思ひます。しかしながら、これらの逆風をプラス思考で考えれば、今ま

に於ける人材が必要なのは、個人か個人的には思っていないか、と個人的には思っています。私も企業で働く一人です。その瞬間瞬間を大切に、日々頑張ってきたと思つていきます。

最近、道路公園を中心とした特殊法人改革や道路特定財源の見直しなどの従来の公共投資に対する批判などがマスコミで頻りに取り上げられています。道路公園に対する指摘などは実態を反映していない悪意すら感じ

られる内容のものが多く、より効率的な企業経営の確立、新手法・手法の提案等、企業が生き残るためには努力が必要で、それは、社会にとつては、安くても、悪くないものが造られるわけですから、結果としてプラスのことだと思います。それ故企業では、今以上に優秀な人材が必要で、要なことと思ひます。従来の発想にとらわれず、要求されていることは何なのか、見極めて、それを迅速に実践行動

今後、NPOによる公共事業への参画が活発になったり、PF1などの手法による事業展開が増えてゆくことや、環境保護に対する関心の高まりと対応、高齢化社会への移行のためのインフラ整備など、これまでまでの知識では対応できないものが多くなると同時に企業では大学に即戦力を求める傾向が強くなると思われます。大学の授業内容や教育方針がこれまで以上に重要になることは想像に難くありません。

後輩諸君に期待すること

私は常に考えていることが一つある。それは各個人が持っている輝きについてである。私の職場は基本的には学歴に関係無く、高卒、大卒が入り混じって同じチームで働いている。職場で高卒の年配者達から良く聞くのは、「あいつは大卒だけど、ただ勉強だけが出来るヤツだ、あいつの下では働きたくない」といふ言葉だ。どんなことでも良いから、君が大学生活で得たものは何なのか、

今、将来について悩んでいるなら、そのことを明らかにするために、先輩等を直接訪問するか、短期アルバイトをするなど、確かめてい

自分自身の足で調べ、確かめてい

自分自身の足で調べ、確かめてい

自分自身の足で調べ、確かめてい

自分自身の足で調べ、確かめてい

原稿の受付
日時受け付けております。
e-mailまたはFAXにてお気軽にお寄せ下さい。
原稿送付先
日大土木会広報部 会
報担当宛
e-mail: dbokku@v1.sci.
chon.nacip
fax: 03 3293
3319

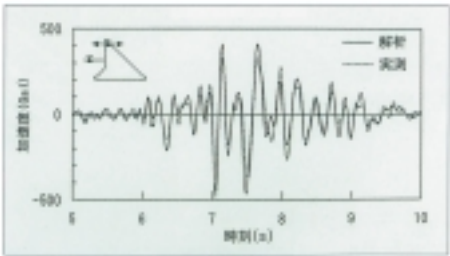
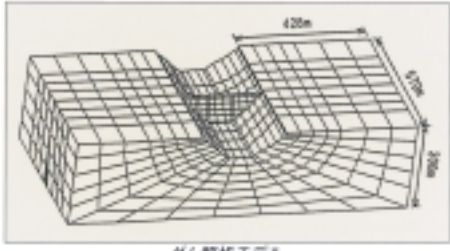
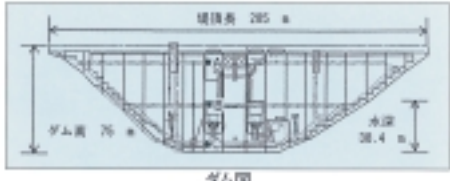
原稿の受付
日時受け付けております。
e-mailまたはFAXにてお気軽にお寄せ下さい。
原稿送付先
日大土木会広報部 会
報担当宛
e-mail: dbokku@v1.sci.
chon.nacip
fax: 03 3293
3319

学内ニュース

塩尻弘雄教授、平成12年度 土木学会賞論文賞を受賞

理工学土木工学科の塩尻弘雄教授が、(社)土木学会から平成12年度土木学会賞論文賞を受賞された。受賞論文は、土木学会論文集 640/5020

00年1月号に掲載された「ダム 岩盤 貯水の連成を考慮した重力式ダムの三次元地震応答シミュレーション」である。塩尻教授は電力中央研究所勤務時代の1980年頃から現在に至るまでダムの動的解析プログラム開発を進めて来られた。今回の論文は、1995年兵庫県南部地震における一庫重式コンクリートダムの地震観測記録についてシミュレーション解析を行った結果をまとめたものである。(関連記事6ページ)



安田陽一助教授 多様な水生生物の遡上 ・ 降河可能な簡易魚道 に関する特許申請

多摩川調布堰での実験を通して

理工学土木工学科に所属する安田陽一助教授は治水利水の機能を果たしている既設の河川横断構造物においても通し回遊性の多様な水生生物の遡上・降河が可能となる魚道の研究を進め、簡易魚道を考案し、日本大学国際産業技術・ビジネス育成センター(NUBETIC)の協力の下で2001年6月にその簡易魚道の特許を出願

し、特許出願番号：特願2001-170118。河川における多様な水生生物の生態系を保全するということは、もともとその河川に生息する水生生物の個体数が維持されて初めて多様な水生生物が保全されることになる。安田助教授は考えている。水生生物の中には海と川を行き来するものがある。このような性質を持つ

水生生物を通し回遊性生物と呼び、アユ、マルタウグイ、モクズガニ、ミナミテナガエビ、ヌマチチブ、ゴクラクハゼ、ヨシノボリなどといった生物が海と川を行き来する通し回遊性生物である。河川には利水治水を目的とした河川横断構造物(堰・落差を伴った床固め工・ダムなど)が設置されている。この横断構造物の構造によっては水生生物が遡上・降河できなくなり、海と川を行き来する生物の個体数が激減してしまう。特に通し回遊性のエビ、カニは幼生を多く孵化し、他の生物個体数の維持に欠かせない存在となっているが、そのエビ、カニが横断構造物によって遡上・降河できなく

ある。しかしながら、遊泳魚類にとつて固定堰からの流れが速いために、大規模な出水によって堰上・下流の水位差が小さくなる場合を除いては遡上することができない。アユが河口から遡上してくる数は年間約120万匹と云われ、神奈川県側の固定堰から数多くのアユが遡上しようとしているが、固定堰下流に溜まってしまふ。その結果、そこに集まってきてアユは鳥や他の魚などによって捕食されやすいのが現状である。アユは内水産物ばかりでなく、河川利用者から愛されている魚であり、

アユの個体数を維持するためには広域に渡って自然繁殖可能な環境が必要である。また、アユの遡上数を増やし、生存率を高めるために調布堰の神奈川県側からアユが遡上できる工夫が必要であり、多くの人が望んでいることでもある。

そこで、安田助教授は多摩川に生息する水生生物の生態系保全を目的として、調布堰の神奈川県側からアユの遡上を可能にするため、幅50、長さ6mの簡易魚道(写真参照)を考案し、固定堰の越流面と河岸斜面との接合部(34%の勾配)、すなわち水際に考案した簡易魚道を設置した。その結果、1匹も遡上できない状況から1時間で最高3500匹近くもアユが遡上し、1日で遡上完了したアユの総数が約1万8千匹にも達し、簡易魚道の有効性を確認した。安田助教授によると、この簡易魚

道の基本的な考えは遡上時のみ魚道を水際に設置し、流水時の流量変化に対応し、魚道内に住み着くことなく、迅速に遡上可能な状況を作り出すことであるという。また、魚が休息可能なように蛇籠によってプールを形成させ、魚道内の流れの急激な変化を透過し、プール内に回転の強い流れが形成されにくい工夫等がなされているという。

工学部では、今年度の「土木の日」記念行事として、福島県の道路の過去から未来へ、と題して、福島県の道路の過去から現在への変遷、さらには未来の道路交通について広く市民に紹介する公開講座を開催した。

この公開講座は工学部と土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

土木学会東北支部の共同主催で見学会とシンポジウムより構成されており、8月3日にまず見学会を実施した。参加者は一般市民、工学部学生を含めて34名であり、芭蕉の奥の細道の始まりの地として有名な「白河の関

ダムの耐震地盤構造を研究

理工学部土木工学科 塩尻弘雄教授



活躍する 大学教員

塩尻弘雄教授は、1964年兵庫県立神戸高等学校(旧神戸一中、昨年末で戦前のまの姿を残していた旧校舎は、妹尾河童の小説「少年H」のテレビ番組に登場)を卒業、東京大学に進学された。同大学院修士課程では、橋梁中の列車振動、列車への風荷重などをテーマとされたが、1970年に電力中央研究所に入所後、原子力発電所、ダム、再処理施設などの耐震、免震、対衝撃設計などについての研究にたずさわられている。電力中央研究所時代には、一年間のコ罗拉ド大学への留学期間を経て、1992年からは、電力中央研究所OBである徳江・花田両日本大学理工学部教授及び竹澤教授、山田

会員募集案内

入会を希望される方へ

会報では、年2回の発行を通じて各部会の活動状況を中心に会員の皆様に情報提供をして参ります。会報をご覧になりさらに本会への理解を深めていただければと存じます。以下に設立趣意、役員会務分掌について改めて紹介させていただきます。本会の趣旨に賛同いただき、入会頂ける方がいらっしゃいましたら、下記の事務局まで

この度、塩尻教授は2000年度の土木学会賞論文賞を受賞された。同教授は、1977年のダムの設計基準改訂に伴い、動的解析の必要性が生じたことから、1980年頃から中部電力と共同で、アーチダムの動的解析プログラム開発をすすめてきた(その時研究対象としたアーチダム(川浦ダム)は、1991年に認可、1994年に運転開始)。1992年頃からは、中部電力により立ち上がった解析法やモデル化

の実証研究のメンバーとして参画し、アーチダムを中心に研究がすすめられた。その後、1995年の阪神地震時、重力式の一庫ダムで大きな地震動の記録が取れたことを受け、管理する水資源公団の協力を受けて、シミュレーションを実施した。そして、その結果

入会を希望される方へ

で二報下さい。会則入会申込書をお送りさせていただきます。

承の必要性が痛感される。国際競争激化の21世紀の扉が将に開かれんとする今、日本大学土木系各学科および卒業生の在り方と役割も又厳しく問われている。20世紀の大量生産大量消費思想から脱却し、質的充実が要請されていることは周知の通りである。それに応えるために高潔な人間性に裏付けされた専門的な知識を持つ人材が求められている。国際的評価に耐える日本大学土木

をまとめた論文「ダム岩盤貯水の連成を考慮した重力式ダムの三次元地震応答シミュレーション」(土木学会論文集No.640/502000年1月号)が今回の受賞論文となった。受賞について、「前年度まで土木学会の表彰委員会で論文査読にかかわっていた関係で、多くの優れた論文や研究者が、より優れた論文の存在により受賞できない例をみており、幸運だったと思います。また飽きつぱい性格のため、共同研究者の熱心であったことが良かったと思います。受賞には、ある程度の完成度(単なる可能性の提示だけでなく有用なことを示すことが必要)が求められるため、時間をかけた継続的な研究が重要だと思えます。日本大学の学術講演会、修士論文発表会等を聞いてみると、大変良い研究が多く為されていると感じます。継続的にすすめるれば、十分賞が期待できると思えます。」とコメントをされた。

役員紹介

会長 山田 清臣 .. 日本大学 教授(理工学部土木工学科、総合学生部長)	常務理事 森元 肇夫 .. エスイー 代表取締役	多摩都市モノレール 代表取締役社長 木田 哲量 .. 日本大学 教授(生産工学部土木工学科教室主任)	塚本 地方 .. 鹿島建設 建設総事業本部営業部長 塚本 恒雄 .. 鉄建建設 代表取締役	官(建設担当) 山田 邦光 .. 建設基礎エンジニアリング 代表取締役社長 横山 博一 .. 日本下水道事業団 理事
副会長 根本 亮 .. 日本風力開発 顧問	理事 石原 昭一郎 .. 飛鳥建設 代表取締役	清野 茂次 .. オリエンタルコンサルタルツ 代表取締役会長	芳賀 秀壽 .. 東京設計事務所 特任理事	吉田 弘 .. 佐藤工業 代表取締役
原田 宏 .. 日本大学 教授(理工学部土木工学科)	役員 内田 興太郎 .. 大豊建設 代表取締役	瀬在 武 .. ダイヤコンサルタルツ 常務取締役	藤田 龍之 .. 日本大学 教授(工学部土木工学科教室主任)	和田 克哉 .. 首都高速道路技術センター 常務理事
松田 慎一郎 .. 都市みらい整備センター 特別顧問	役員 小島 朗史 .. 日本港湾コンサルタルツ 代表取締役	山 淳 .. 日本大学 教授(理工学部土木工学科)	巻内 勝彦 .. 日本大学 教授(理工学部社会交通工学科教室主任)	入江 平門 .. 川崎市交通局 顧問
村田 恒雄	木内 孝蔵	盛武 建一 .. 会計検査院 総括調査	三橋 宏次 .. 漁港漁村建設技術研究所 理事長	



駿河台校舎新1号館・完成イメージ

喫茶室

「ダンスを踊ってみませんか」

「退職したら何も趣味が無いと時間を持て余すぞ」と先輩に言われた。そんなある日、映画の「She's Dance」を観てから、学生時代のタンバを思い出してダンスでもしようと思っただけのダンスサークルに入会した。

不安であったが、踊ってみると結構楽しいものである。自病であった腰痛が直り、姿勢が良くなった感がある。練習日は各週の土、日曜日であるが、行けない日もある。会員は40代から70代代の老若男女である。女性も引続き、趣味の一つとしてダンスを踊ることにしている。

練習内容は、ラテンのキューバンルンバ、チャチャ、モダン、ワルツ、タンゴ等である。2時間たっぷり真面目に練習すると汗だくになり、後のビールの旨さは、また格別である。

今後とも引続き、趣味の一つとしてダンスを踊ること(S・Y 56才)

系各学科、そして卒業生を維持発展させるためには過去の栄光や伝統に安住し、変革を回避することはもはや許されない。

この激変する21世紀に向けた新しい社会的要求にこたえるため、更なる学術技術の研鑽と進展を目指して、日本大学土木系各学科の卒業生ならびに教員の持てる経験と知識、勇気と叡知を結集し、産・官・学におけるリーダーたる人材を育成するたための組織化と活動は、将に焦眉の急と考える。以上のような明確な目標を持つ組織を設立すべしとの声は、母校を愛する卒業生ならびに教員から日毎に高まっている。一方、今日、日本大学土木系各学科ならびに卒業生に対する社会の評価は、誠に厳しいものがあり、私共はそれを真摯に受け止めなければならない。栄光の歴史と伝統に安住することなく、卒業生と教員との絆を一層深め、従来の親睦的諸会とは異なる各学科の発展のみならず、母校の発展のみならず、豊かな国土の形成、経済基盤の整備、国民生活の向上と福祉の進展に貢献する「日大土木会」の設立は誠に時宜を得ていると確信する。

これらの目的を達成するため、各種事業を積極的に行ない、高い志を持って社会に裨益する「日大土木会」を発足させることを提案する。

ここに本会の設立に当たり関係各位のご賛同とご協力を賜りたくお願い申し上げます。

日大土木会事務局
101 8308
東京都千代田区神田駿河台1-8
日本大学理工学部土木工学科内
tel: 03 3259 0662
fax: 03 3293 3319
e-mail: doboku@ci.vil.cst.nihon-u.ac.jp